

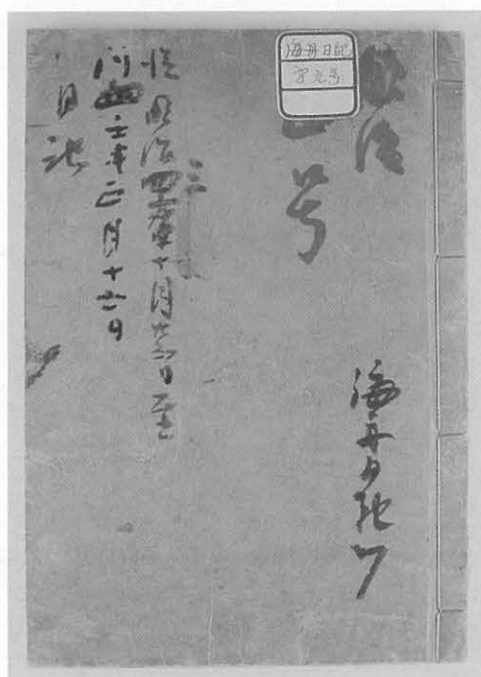
江戸東京博物館史料叢書

勝海舟関係資料

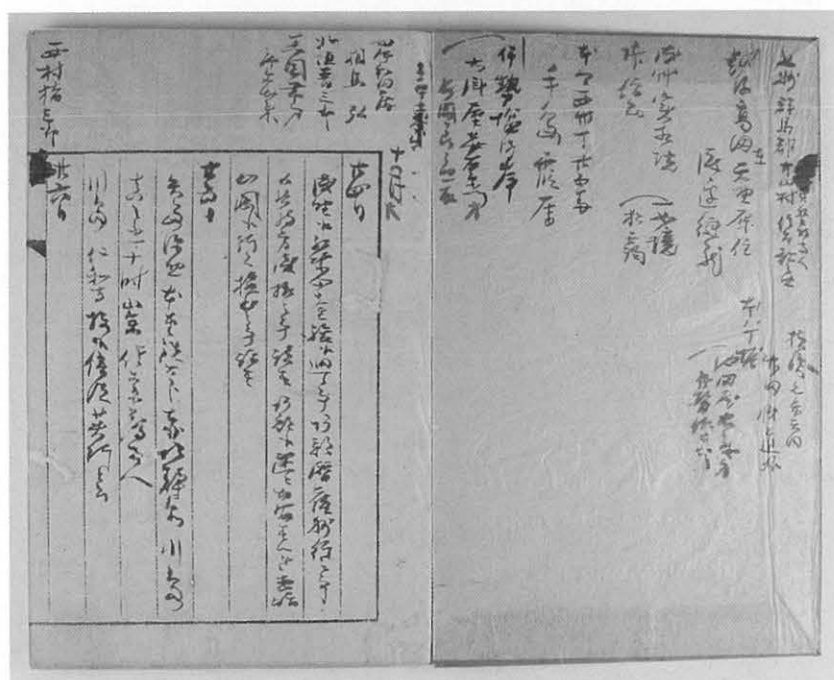
海舟日記

(五)

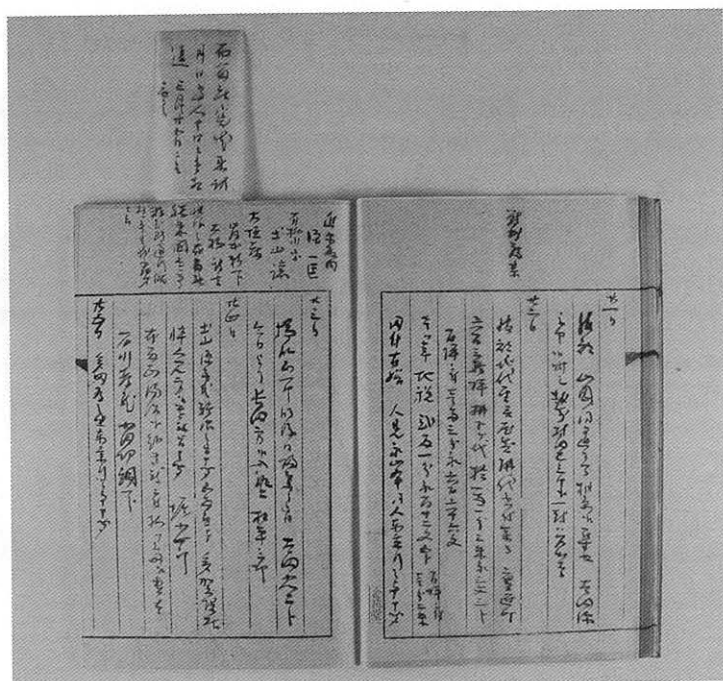
東京都江戸東京博物館
都市歴史研究室編



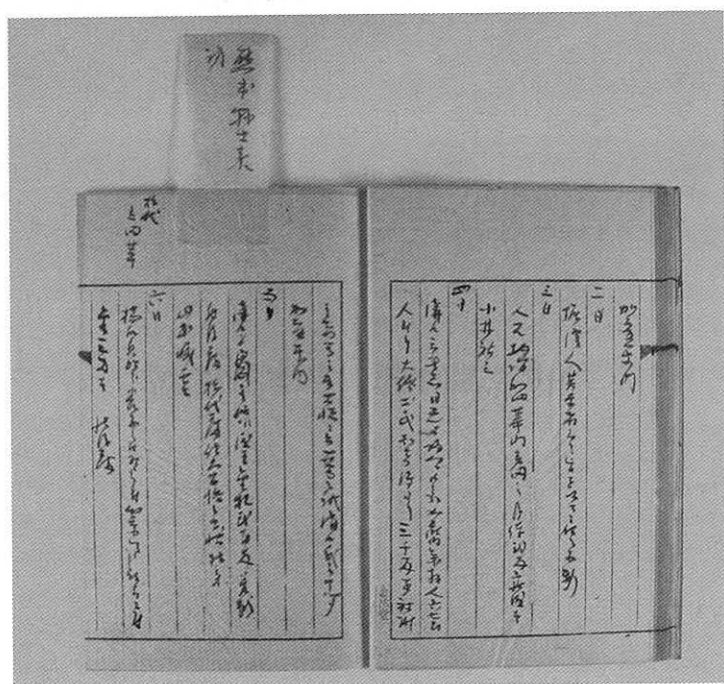
1 表紙



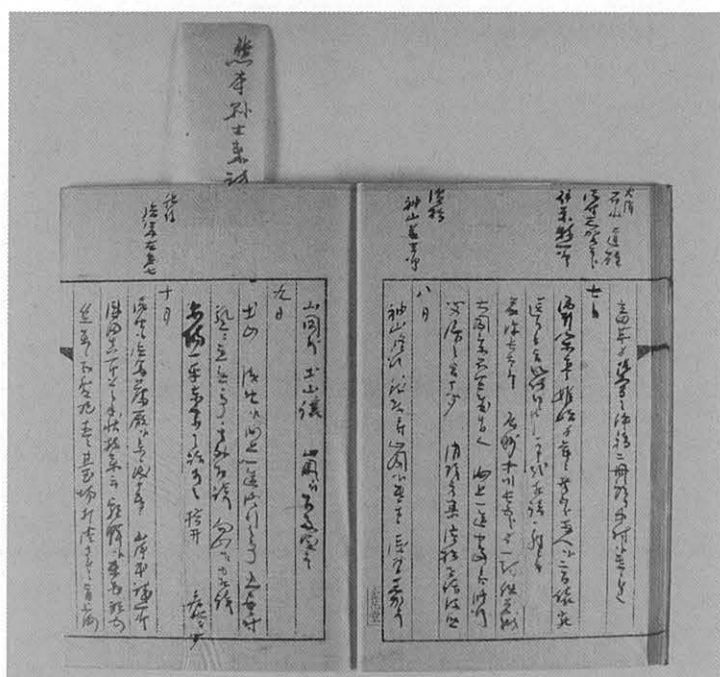
2 見返しの書き込み



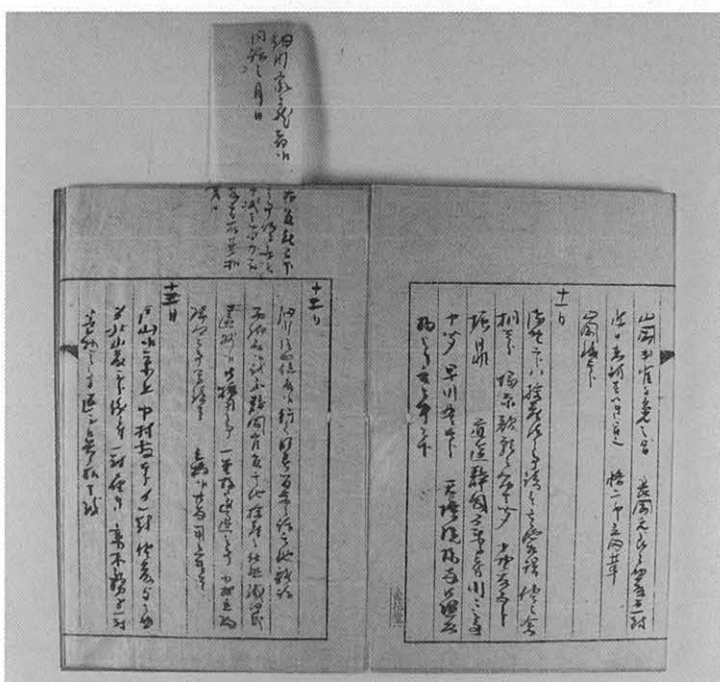
3 明治4年3月24日条の付箋



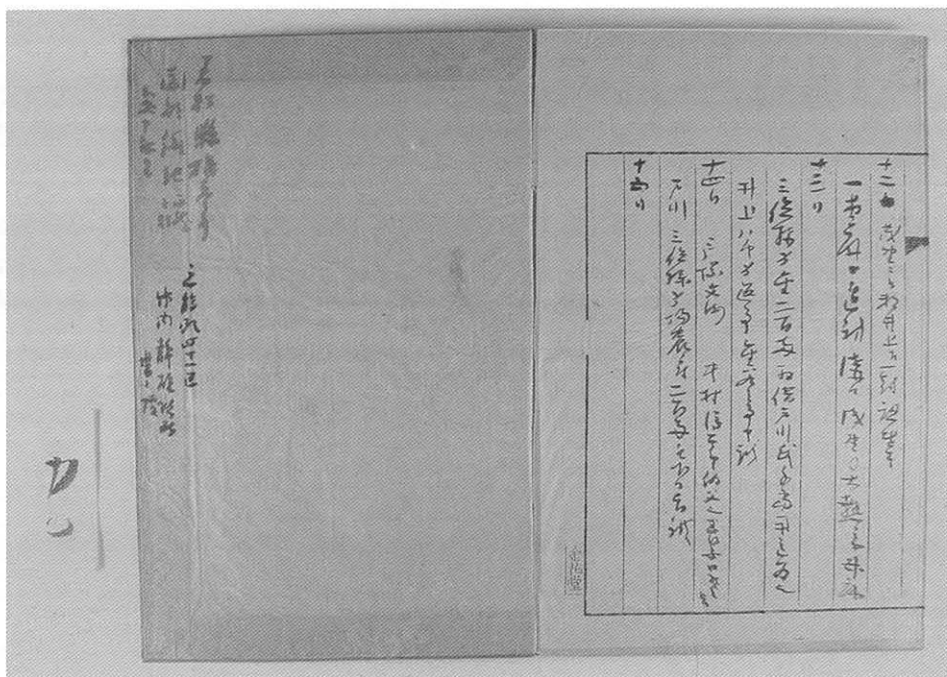
4 明治4年5月5日条の付箋



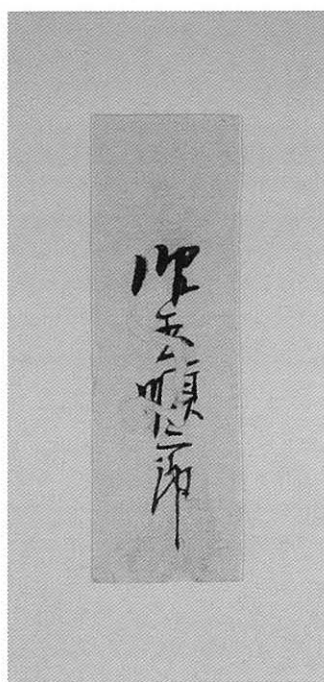
5 明治4年5月9日条の付箋



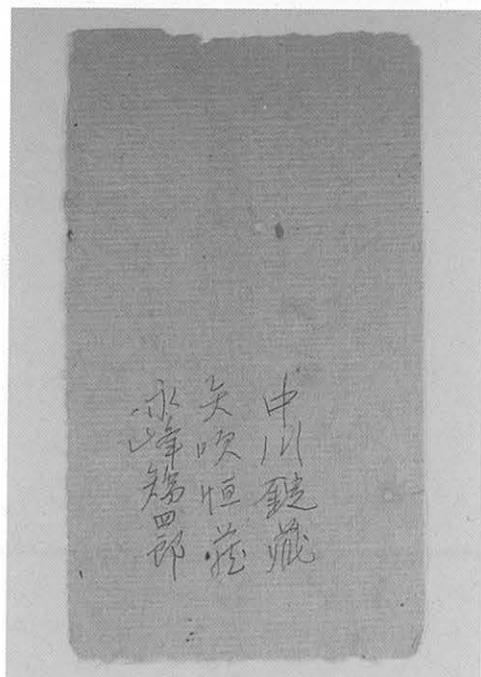
6 明治4年12月12日条の付箋



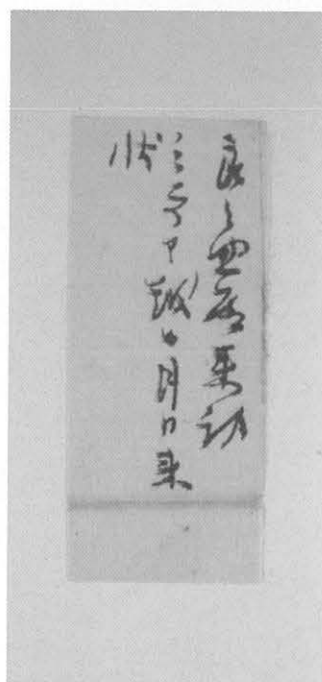
7 卷末部分と挟み込みの紙片（左）



8 付属文書①



9 付属文書②



10 付属文書③

目次

凡例

海舟日記 九

解説

(明治三年十月二十四日(同五年正月十五日))

藤田英昭

.....

凡 例

一 本書は、東京都江戸東京博物館所蔵勝海舟関係資料のうち、

「海舟日記」第九冊（当館資料番号 九四二〇一七〇

五）を翻刻したものである。

一 本文編は、中段を本文とし、上段に原本罫紙欄外に記された補記などを記し、下段には本文等に登場する人名を中心に註を適宜付した。人物註では当該期における当人の所属・肩書きを記した。註に記す藩名は、煩雑を避けるため、廃藩置県（明治四年七月）以降であっても、明治初年に使われた藩名を用いた。また、旧幕臣で静岡藩関係者は、役職名のみで藩名を付していない場合もある。

一 翻刻にあたり、原本の様式を尊重するようつとめたが、

原文の形態を損なわない程度に、つぎのようにした。

1 日付は、便宜上ゴシック体にした。

2 文中に適宜、読点（、）および並列点（・）を加えた。

3 漢字は、常用漢字にあるものは、原則としてこれを用いた。

4 宛字・誤字・衍字はそのまま表記して、右傍に（ママ）

（衍力）を付した。正しい文字がわかる場合は、右傍に

（○○カ）と記した。

5 変体仮名は、原則として同音の平仮名に改めたが、助

詞の「而」「江」「得」「之」は原文表記のままとした。

6 助詞のうち「ニ」「而」「江」は小文字・右寄せとした。

7 合字の々はそのままとした。

8 欠損、または判読不明の文字は、□□（字数分）、

「」」（字数不明）で示し、触損などは右傍に（虫損）

（欠損）と記した。

9 踊り字は、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」、

を用いた。大返しは「く」（字数分）を用いた。

10 本文中の補記や加除訂正は、原型を活かすようにつと

め、当該箇所¹¹の訂正あるいは削除された文字に見せ消ち

「ミ」を付した。

11 朱書は、右傍に（朱書）と記した。

一 卷末に、本書の解説を付した。

一 本書の編集は、近松鴻二（当館専門調査員）・藤田英昭（当館インターン）が行い、刑部芳則・土金師子・藤井明広・山本俊の各氏の協力を得た。

一 なお、当館では「海舟日記」のマイクロフィルムに閲覧を実施している。卷末に「海舟日記」の書誌情報とあわせて、閲覧用マイクロフィルム情報を一覧にしたので、参照されたい。

江戸東京博物館
史料叢書

勝海舟関係資料 海舟日記（五）

発行日 平成二十三年三月三十一日

編集 東京都江戸東京博物館
都市歴史研究室

発行 東京都

（公益財団法人）

東京都歴史文化

東京都江戸東京博物館

〒130-0015

東京都墨田区横網一丁目四番一号

TEL 〇三―三六二六―九九一八（研究室）

FAX 〇三―三六二六―八〇〇二

印刷 勝美印刷株式会社

ISBN 978-4-924965-75-1C0021